



ラファエロ「エゼキエルの幻視」 フィレンツェ

阿佐ヶ谷教会



信友会 会報

4月例会報告（2019年4月28日開催）

聖書研究 エゼキエル書

阿佐ヶ谷教会の副牧師であった江原有輝子先生が5月9日にパラグアイに着任されてから3週間が経とうとしています。さっそく現地から報告がありました。「40時間も飛行機に乗って8時間もバスにゆられて着いたら、そこが日本そのものだった。とても不思議な気がします。」というピラポの町。もともとは戦後に始まった日系移住地で、診療所は日本語も併記しているし、農協もある、スーパーも日本名。日本語は普通に通じるようです。

とはいえ日本とは地球の反対側なので季節は秋。これから冬を迎えます。この地で牧会をやっていく先生に祈りを持ってエールと支援を送りつづけたいと思います。（Y. O）

『預言者エゼキエル』—その時代と信仰—

古屋治雄牧師



今回は、旧約聖書の三大預言書の中の最後の預言者エゼキエルを取り上げます。

預言者エゼキエルの活躍の時代はエレミヤと重なります。活躍の場所はエレミヤのエルサレムではなく、捕囚の地のバビロンでした。紀元前597年のバビロニア王ネブカドネツアルによるユダ王国の都エルサレムの徹底的な破壊と略奪の時、第1次バビロン捕囚の時に捕囚民と行動を共にしていたのです。エゼキエルのユダヤ的な名前の由来は、エゼキは力を強める、エルは神で「神は強くしてくださる」という意味です。エゼキエルの預言は、彼が頻繁に「幻」を見たこと、この幻視体験による預言が特徴的です。

エゼキエルの召命

エゼキエルの召命については、エゼキエル書1章3節以下に、「カルデアの地ケバル川の河畔で、主の言葉が祭司ブジの子エゼキエルに臨み、また、主の御手が彼の上に臨んだ。」と書かれています。カルデアはバビロン周辺の地方名で、2節にある「ヨアキン王が捕囚になって5年目」とあるので、この召命は



紀元前593年であったと特定されます。エゼキエルの預言者としての活動は20年ほどでした。エゼキエルは祭司であり預言者になったのです。エレミヤと同様に祭司職を担いつつ、神の召しを受けた預言者になったのです。

バビロン捕囚の次第は列王記下24章にあり、賢明なウジヤ王がアッシリアへの援軍のため北進してきたエジプト軍を阻止する戦いで戦死しました。エジプト王ネコにより擁立された諸王が「主の目に悪とされること」を行い、ヨヤキン王の

時代に圧倒的な力を持ったバビロン王に、エジプトの支援を受けられないままエルサレムを蹂躪されます。列王記下24章13節から、神殿や王宮の宝物、高官、宦官など勇士1万人、すべての職人、鍛冶を捕囚としてバビロンに連れ去ったとあります。これが第1次バビロン捕囚です。

エゼキエルの召命は、1章～3章に幻視体験により書かれています。激しい風の中に琥珀色の光、四つの顔を持った生き物が飛び回り霊の行く方向に進む様子が書かれます。2章3節には主の霊が「人の子よ、わたしはあなたを、イスラエルの人々、わたしに逆らった反逆の民に遣わす。彼らはその先祖たちと同様わたしに背いて今日この日に至っている。恥知らずで、強情な人々のもとに、わたしはあなたを遣わす」。6節に「人の子よ、あなたはあざみと茨に押しつけられ、蠍の上に座らされても、彼らを恐れてはならない。…彼らが反逆の家だからと言って、彼らの言葉を恐れ、彼らの前にたじろいではならない。たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、あなたは私の言葉を語らなければならない」。3章1節では、神は巻物を食べて、捕囚になっているイスラエルの家に行って神の言葉を語りなさいと言います。7節には、「イスラエルの家は、あなたに聞こうとはしない。まことに、彼らはわたしに聞こうとしない者だ」。11節で「そして捕囚になっている同胞のもとに行き、たとえ彼らが聞き入れようと拒もうと、主なる神はこう言われる」と言いなさい。神はエゼキエルが民を恐れて預言をしないことをも許さないのです。

イスラエルの民は、ヤーウェ神の信仰を捨ててはいないのですがカナン定住の中で、地元のバアル神の信仰である穀物の豊作祈願、子孫繁栄など豊穡の神にすがる偶像崇拜に走ってしまい、ヤーウェ神の正しい礼拝ができていないと言うのです。

バビロン捕囚

第1次捕囚後のユダ王国はゼデキヤ王の政権のもとに11年間続きましたが、ゼデキヤ王も神の前に悪となす振る舞いの中にありました。エゼキエル書6章には「偶像礼拝の山」の小見出しで、偶像礼拝についての糾弾が預言されます。3節に「わたしは剣をおまえに臨ませ、聖なる高台を破壊する。祭壇は荒れ果て、香炉台は砕かれる。わたしはお前たちの中の殺された者を偶像の前に投げ捨てる」。捕囚残留者にも厳しい裁きが待っていると警告しているのです。



第2次捕囚まで11年間の猶予があるという希望的観測があったかもしれませんが、それも許されないのです。神の裁きは厳しく、バビロニアを神の裁きの器として使うと言います。バビロニアにはそのような認識はなくとも結果的にユダ王国は徹底的に破壊され、滅ぼされています。また、神はバビロニアなど強国の横暴にも目を光らせ、強大だったバビロニアはペルシャ王キュロスに滅ぼされ、イスラエルの民の帰還に繋がるのです。

第1次捕囚のヨアキン王から残留王国を引き継いだゼデキヤ王は、バビロニアを裏切りエジプトに支援を求めます。列王記下24章20節で、主の目に悪とされることをことごとく行なったため「エルサレムとユダは主の怒りによってこのような事態になり、ついにその御前から捨て去られることになった。ゼデキヤはバビロンの王に反旗を翻した」。

エゼキエルは、ゼデキヤ王のエジプトへの援軍の依頼を聞いて、17章で次のように援軍依頼への過ちを糾しています。11節以下でバビロン王との契約を破って、エジプトに馬と軍勢を求めることでうまくはいかない。17節で、「戦いになって、壘が築かれ、堡壘が建てられ、多くの命が滅ぼされようとも、ファラオは彼のために、強力な軍隊や多数の兵隊をもって戦いはしない。彼は誓いを軽んじ、契約を破った。彼は約束をしながら、これらすべての事を行なった。彼は逃れることができない。」

紀元前587年、ユダ王国はバビロニアのネブカドネツアル王によって滅ぼされます。列王記下25章で、エルサレムの王宮や神殿は破壊され、逃亡したゼデキヤ王も捕らえられ両眼を潰されてバビロンに連行され、財宝なども持ち去られます。エゼキエル書24章で、「火の上の鍋」の小見出し、3節～14節にエルサレムの戦いと崩壊について書かれています。

このエルサレムの徹底的な破壊とユダ王国の滅亡と同じくしてエゼキエルの妻の死が書かれます。エゼキエル書24章15節、「人の子よ、わたしはあなたの目の喜びを、一撃をもってあなたから取り去る。あなたは嘆いてはならない。泣いてはならない。涙を流してはならない。声をあげずに悲しめ。死者の喪に服すな。頭にターバンを巻き、口ひげを覆うな。嘆きのパンを食べてはならない。その夕、わたしの妻は死んだ」。神の厳しい裁きによるユダ王国の滅亡が、エゼキエルの妻の死という形で象徴的に預言されています。

イスラエル回復の希望預言

2 回にわたるエルサレムの破壊とバビロンへの捕囚という神の裁きにより、ユダ王国と民衆は滅ぼされました。神は厳しい裁きを通して傲慢にふるまった王国の罪を厳しく糾弾したのですが、一方で神はイスラエルの民が自らの過ちを認めて悔い改めるならば救いの手を差し延べてくださるのです。刑罰だけではなく悔い改めた「契約の民」に聖なる神として働いてくださるのです。

エゼキエル書 33～34 章に、羊飼いの預言があります。34 章 11 節に「見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼らの世話をする。…諸国の民の中から連れ出し、…わたしはイスラエルの山々、谷間、また居留地で彼らを養う。…」。

本来、羊飼いは王たちであり彼らが民を養うのですが、ユダ王国の王たちは自分を養うことに終始して民を養わないので、神自らが散らされた民を集めて養うというのです。詩編 23 編の羊飼いのようです。



37 章には有名な枯骨の復活の預言があります。エゼキエルは神にいざなわれて枯れた骨の谷に降り、骨に向かって預言し霊を吹き込みます。すると骨が集まり彼らは生き返ります。これらの人の群れを神は生かし、自分の土地に住まわせるというのです。そして先に滅亡した北イスラエル王国とユダ王国を一つにすると言います。24 節で「わたしの僕ダビデは彼らの王となり、一人の牧者が彼らすべての牧者となる。彼らはわたしの裁きに従って歩み、わたしの掟を守り行ふ。彼らはわたしがわが僕ヤコブに与えた土地に住む。そこはお前たちの先祖が住んだ土地である」。そしてイスラエルの民が永遠にそこに住み、ダビデを彼らの支配者として「平和の契約」を結ぶと言っています。ここではダビデの末の救い主の到来と復活信仰を連想させます。

40 章からは、新しい神殿復興の幻が語られます。エルサレムの神殿はバビロニアに徹底的に破壊されました。エゼキエルは幻でエルサレムに連れ出され建設された神殿を見せられます。麻縄と測り棒を持った人に案内され東西南北の城門、庭、拝殿や神殿を案内されます。そして神殿の設計図を描くように部屋の広さや壁の寸法まで詳細に語られます。神殿の詳細をイスラエルの民に告げるように命令されます。また、47 章には。神殿から命の水が流れ出し、川となって魚を養い、河岸には果実を实らせています。

エゼキエル書の最終的な編纂はバビロン捕囚時代・帰還後であり、編集者たちが王国不滅信仰のある国がなぜ滅亡したか等について歴史を遡り反省・検証して、真の羊飼いや枯れた骨の復活など復活思想にたどり着いたと思われます。

(文責：玉澤武之)